

新たな北海道総合開発計画に関するシンポジウム
～「ほっかいどう学」の展開に向けて～

- 1 日 時 平成29年3月21日（火）14：30～17：00
- 2 場 所 札幌第一合同庁舎 2階講堂
- 3 主 催 国土交通省北海道開発局
- 4 後 援 北海道、北海道教育委員会
- 5 参加者 約130名
- 6 概 要 以下のとおり

◆主催者挨拶 《国土交通省北海道開発局開発監理部次長 原 俊哉》

- ・ 昨年3月に新たな北海道総合開発計画が閣議決定され、「食」と「観光」を北海道の戦略的産業と位置付け、その振興を図ることが掲げられている。また、計画では、「人こそ資源」と位置付けて、人口減少時代であるからこそ、地域づくりに取り組む人材を発掘・育成することを目指すこととしている。
- ・ 本シンポジウムのテーマである「ほっかいどう学」は、その取組の一環として盛り込まれたものであり、より多くの人々に地域づくりに関心を持っていただけるように、北海道の魅力や地理、歴史、文化等について、子どもから大人まで幅広く学ぶことができる取組として取り組んでまいりたい。
- ・ 本日のシンポジウムが、「ほっかいどう学」の取組のキックオフとして意義あるものになるとともに、多くの皆さまに地域づくりへの関心を持っていただく機会としていただければ幸いである。

◆事務局説明 《国土交通省北海道開発局開発監理部開発計画課長 竹原 勇一》

「新たな北海道総合開発計画に位置付けられた『ほっかいどう学』の概要等について」

- ・ 明治2年、北海道に開拓使が設置されて北海道の開発が始まり、戦後、昭和25年には、食料の増産、資源開発等を目的として、北海道開発法が制定された。
- ・ 北海道開発法に基づき、国は、これまで8期にわたり北海道総合開発計画を策定し、その時々々の国の課題の解決に貢献してきた。
- ・ 昨年3月に閣議決定された「北海道総合開発計画」では、地域づくり人材の発掘・育成のために「ほっかいどう学」の取組を促進することが盛り込まれた。
- ・ 「ほっかいどう学」の展開に当たっては、北海道教育委員会が取り組んでいる「道民カレッジ」や「ネット検定」などの取組とも連携して取り組んでいきたい。
- ・ 「ほっかいどう学」の学習の目的は、北海道の地域特性や個性に焦点を当てて、これを日本や世界との関係を意識しながら学んでいただくこと。そして、北海道に対する理解や愛着を深めていただき、世界の北海道づくりに取り組む人材、北海道の経済発展を牽引し得る人材を発掘・育成することである。
- ・ 学習の分野は、北海道の自然や歴史・文化、環境、産業構造、地域づくりなどを想定。一方、各分野に共通する分野横断的な切り口として、インフラや人、北海道の経済状況なども想定している。

◆基調講演Ⅰ 《ノンフィクションライター、編集者 北室 かず子氏》

「北海道をつくった技術者たちの“ノブレス・オブリージュ”」

- ・ “ノブレス・オブリージュ”とは、直訳すると「高貴であることは義務を伴う」というフランス語。言ってみれば、恵まれている者は、自発的に無私の行動を起こさなければならぬという自覚や矜持、誇り、使命感のようなもの。
- ・ 近代以降の北海道には、自己が持つ力を人のために役立てること、そのために自己を向上させていくという、“ノブレス・オブリージュ”の精神にも通ずる技術者たちの足跡

がたくさんある。

- ・ 岡崎文吉の7つの“ノブレス・オブリージュ”。①マルチである。②エクセレントである。③ストイックである。④独創的である。⑤クリエイティブである。⑥グローバルである。⑦エレガントである。
- ・ 論理性が高く、緻密で努力をいとわない、体力がある、土木工事に対しても親和性が高いという特性を持つ下級武士たちは、明治時代になると、刀を近代技術に持ち替え、「サムライ・エンジニア」となった。
- ・ 岡崎文吉や廣井勇、新渡戸稲造などはみんな「サムライ・エンジニア」。新渡戸稲造は、「サムライは保有する武力、武力を行使し得る特権を誇りに思っていたが、同時に孟子が愛の力について教えたことに心から同意していた」と説いた。
- ・ 札幌農学校に集った下級武士たちの子は、辛抱強さや緻密さといった武士の特性に愛の力をプラスして、新天地「北海道」の開発に挑んだ。これこそが「サムライ・エンジニア」の“ノブレス・オブリージュ”である。
- ・ 近代以降に主な開発が進展した北海道では、上記のような「サムライ・エンジニア」を中心とした技術者の努力によって欧米の近代技術が直に移入された。その軌跡を、世界の科学史・技術史の文脈の中で読み解いていくことは、北海道にとって大きな意味がある。

◆基調講演Ⅱ 《札幌市立発寒西小学校校長 新保 元康氏》

「ほっかいどう学のすすめ」

- ・ 小学校の社会科が随分変わり、昔は北海道のことを勉強していたが、今はほとんど勉強しなくなった。北海道への愛着とか関心とかが十分に育てられていないのではないかというのが私の問題意識
- ・ 昨年8月の台風で十勝地方が大きな被害を受けた。被害があったことは知っているが、例えば日勝峠の復旧のための調査がどのように行われているのか、その裏にどのような苦労があるのか、学校の先生は誰も知らないし、そうすると、当然のことながら子どもたちも知らない。中には日勝峠の場所を知らない若い先生も…
- ・ また、十勝地方の畑を見て、多くの先生や子どもたちは、自然が豊かで素晴らしいと表現すると思うが、その畑は自然でも何でもなくて、人が作り上げた畑であり、土であり、その背景には、長い年月をかけて肥沃な大地を作り上げたという北海道の歴史があるが、そのことを知らない。
- ・ 今は、小学校を卒業して6年後、18歳で選挙権を有することになったが、道議会議員を選ぶためには、ある程度北海道に関する知識がなければならないのではないか。
- ・ 「ほっかいどう学」の展開方法はいろいろある。例えば、新たな副読本を作ったり、教師を対象とした研修を行ったり、児童向けのホームページを作ったりというようなことを行っていければと思う。

◆パネルディスカッション

「ほっかいどう学の展開に向けて」

(コーディネーター)

一般社団法人北海道開発技術センター理事、地域政策研究所長 原文宏氏

(パネリスト)

- ・ ノンフィクションライター、編集者 北室 かず子氏
- ・ 国立大学法人北海道教育大学教育学部准教授、
同学校・地域教育研究支援センター 生涯学習・地域連携部門長 今 尚之氏
- ・ 札幌市立発寒西小学校校長 新保 元康氏

〈コーディネーター冒頭挨拶〉

(原 文宏氏)

- ・ 社会資本整備を進める際に、実際に予算をつけるのは政治であり、その政治家を選ぶのは、国民、市民、地域の住民である。国民が政治家を選ぶ際の尺度は、一人ひとりが持っている知識や経験であり、そういう意味では、政治と教育は、一見縁遠く感じるが、非常に強く結びついているのではないかと。
- ・ ハード官庁の国土交通省の計画に「教育」が初めて盛り込まれた。極めて画期的なこと。
- ・ 今日、「ほっかいどう学」のキックオフとして、①北海道の魅力やすばらしさについて、②「ほっかいどう学」の展開に向けて、大きくこの二つのテーマについてディスカッションしていきたい。

〈テーマ1：北海道の魅力やすばらしさについて〉

(北室 かず子氏)

- ・ 北海道には、人や技術に関する歴史、遺産がたくさんある。これらを事実に基づいて再構築し、物語性を持ったものとして発信していくことによって、北海道を支えている社会資本を見る目が深まるし、自分たちがこれから社会を担っていく上で、どのような参画の仕方があるのかという点でヒントになるのではないかと。
- ・ 写真の持つ力は非常に大きい。北海道は、近代以降に開発が大きく進んだので、全てが国によって写真に撮られているという大きな強みがある。写真を発掘して、北海道の開発というコンテンツで再構築すれば、非常に良いものができるのではないかと。

(今 尚之氏)

- ・ 四方を海に囲まれているとか、非常に厳しい積雪寒冷の気候であるとか、そういったことを克服し、時には利用しながら、特に近代以降、非常に短い時間で多くの努力をし、「てまひま」一労力と時間一をかけて北海道のエクメネ（人が居住している地域）を拓げてきた。そういう北海道の物語自体が北海道の大きな魅力の一つである。
- ・ 他方、急速にエクメネが拡大してきた北海道であるが、ダムや水路、港を作ったというわけではなく、これらを維持管理してきた人たちがいて、一人ひとりが非常に苦労しながらそれら社会基盤を守り、活用しながら北海道を作ってきたというのも北海道の魅力であるし、決して忘れてはいけないことである。
- ・ 北海道開発を記録した写真や動画はたくさん残っているが、それらが散逸しており、どこにどういうものがあるのか分からないというのが問題である。写真を集めると同時に、最新の技術を利用しながら写真などの映像記録を活用できる環境を整備することも必要である。

(新保 元康氏)

- ・ 先日卒業した6年生に“北海道の良いところは何か”ということで自由に記述してもらった。「自然が豊か」とか「食べ物がおいしい」という記述のほかに、「広い」とか「災害が少ない」、「優しい」、「土地が安い」、「観光」、「住みやすい」、「アイヌ文化」などが挙げられた。
- ・ 一方で、「歴史」に関する記述はゼロであり、そのほかにも、「第二次産業」や「第三次産業」、「世界」、「未来」に関する記述はなかった。これら子どもたちに書かれないものに、これからの「ほっかいどう学」の取組のヒントがあるのではないかと。

〈テーマ2：「ほっかいどう学」の展開に向けて〉

(新保 元康氏)

- ・ 現在、次の学習指導要領が動き出しているところ。この後3年間は移行期間であり、いろいろなトライアルが可能な時期

- ・ 次期学習指導要領のキーワードは、「社会に開かれた教育課程」であり、学校の教育が社会ときちとつながらなければならないということが背景にある。まさに「ほっかいどう学」の取組・考え方とリンクしている。
- ・ 「ほっかいどう学」の可能性は非常に大きい。総合的な学習の時間における学習モデルの作成のほか、学習キット・パッケージの作成・提供、副読本の作成、Webでの情報発信など、いずれにしても学校現場に届けていくことをゴールとして取り組んでいきたい。
- ・ 学校というのは本当に入りにくいところ。例えば、図書館とか入りやすいところを使ってジワジワやるとか、あるいは小さな成功例を積み重ねて、気がついたら（学校に）入り込んでいるというのが理想

（今 尚之氏）

- ・ 学校教育はもとより、社会教育を専門としている立場から言うと、子どもたちも、学校でしっかり知識を得たり、考える力を得て、北海道の歩みであったり、北海道の特徴、魅力を見出していき、いわゆる社会を創る学び（＝社会教育）を大人と一緒にしていくことが必要である。
- ・ アメリカの教育思想家であるイリッチは、学びの4資源として、「事物」、「模範」、「仲間」、「年長者」の4つを掲げた。この4資源が揃うことにより、学びの質は高まり、逆に欠けていると学びは不完全なものになってしまう。私たちは、学びを支える社会基盤として、「ほっかいどう学」推進のためにこの4資源を準備していかなければならない。
- ・ 教育のことを考えるときには、どのような内容を教え、学ぶのか、それをどのような方法で実施するのか、そしてそのための仕組みをどうするのか、「内容」、「方法」、「仕組み」を考えることが必要。今後、地域の教育専門職である社会教育主事、博物館の学芸員や図書館司書との連携等も含めて、「ほっかいどう学」の展開に当たっても、この3つをしっかりと考えていかなければならない。

（北室 かず子氏）

- ・ 取材に当たり心がけていることは、自分で下調べをして、ある程度咀嚼をした上で疑問を作り上げて取材に臨むということ。自分の中で疑問を作り、その解決に向かって自分自身を納得させるための取材でなければ、人に伝えるときにおもしろいものを作ることはできない。
- ・ 今後とも、フリーライターとして、エッジの効いたコンテンツを作り上げて、北海道の魅力やすばらしさを伝えていきたい。

〈コーディネーター総括〉

（原 文宏氏）

- ・ 学校であれば先生、図書館であれば図書館司書とか、いろいろと関わってくる方々がいる中で、まずは、一人ひとりに「ほっかいどう学」というものを意識してもらい、理解してもらうことが必要
- ・ 公共事業、社会資本整備の社会的意味、その裏で支えている人とか技術とか、そういうことをきちと知っていただくということを基本にして取り組んでいかなければならない。
- ・ 自分自身の経験から言えば、「教育」に浸透し、成果が見えてくるまでには非常に時間がかかる。最低でも10年はかかるという覚悟を持って、皆さんと手を組んで、私も微力ながら取り組んでいきたい。

（以 上）